
絵描き少女と夕暮れうさぎ。

羅夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵描き少女と夕暮れうさぎ。

【Nコード】

N8019Z

【作者名】

羅夢

【あらすじ】

絵を描くことが好きな少女と、彼女の絵が好きな少女。

甘いような、甘くないような、ほのぼのとしたお話です。

※この小説は百合要素が含まれています。

プロローグ

放課後、一人きりの美術室。

美術室の窓で切り取られた小さな外の世界はもう日が傾きかけていて、部屋一面を鮮やかな橙色に染め上げている。

夕日は鮮やかでとても綺麗。

私は夕日のよく見える位置にキャンパスと画材を並べていくと、瞬く間に絵の世界に吸い込まれていった。

キャンパスに自身の思いをぶつけて、私の心を絵にして映し出していく。

すると真っ白だったキャンパスは次第に赤や青や黄色や黒など様々な色で、夕日に見劣りしないくらいに鮮やかに色づいていった。

私の心で描いていくような感覚が心地よくて、周りのことなど気にせずに一心不乱に筆を走らせていく。

さっきまで廊下から聞こえてきた話し声や足音はもう耳に入ってはこなくて、聞こえてくるのは筆を走らせる微かな音だけだった。

日が沈み暗くなった外を一瞥すると、筆とパレットを机の上に置いた。

絵を描いている時はまるで魔法道具のように見えていたはずなのに、今は変哲もないただの筆とパレットに見えてしまうから不思議。

急いで画材を片付け、ゆっくりと深呼吸をすると書き終わったことへの満足感や充実感などが新鮮な空気とともに体に染み渡っていく。吐く息はもうほんのりと白くて、冬はもう間近だよと私に教えてくれるような気がした。

雪

冬に入って間もなく今年の初雪が降った。

数年ぶりの雪に校内のあちこちで歓声があがっていく。

雪のせいでテンションが上がっているのか、「雪合戦しようぜ！」とか「これなら雪だるま作れそうだねー！」とか、みんな小学生の頃に帰ったみたいで少し笑ってしまう。

まあ、そう言う私も早く美術室で雪景色を描きたくて、そわそわしながら何度も何度も時計を確認してしまっていたから人のことは言えないんだけど。

中々止まない雪はみんなを笑顔から不安げな表情に変えていった。雪は危険なほど降り積もり、みんな歓声の声は次第に不安げなものになっていく。

本当は雪のために早く下校しなければならなかったことになってはいたけれど、私の足は当初の意志と変わらず美術室に向かう。

初雪を、この大雪を描きたい。

たったそのためだけに美術室へ向かう。

美術室に居るのが見つかったら『それだけのために帰らないなんてお前は馬鹿なのか？』なんて、くだらない小言を言う先生はきつと……いや確実に居るだろう。

最悪の場合、美術室まで押しかけて無理やり帰らせてくるかもしれない。

だけどそんなことは気にしない。

『それだけ』で片付けてしまえばそれで終わりになってしまう。

けれど私は数十年に一度程度のこの大雪を『それだけ』で片付けたくはないし、片付ける気も全くなかった。

頭の中で描きたいことや、構図がどんどん決まっていく。

周りの不安げなどんよとした雰囲気とは違い、私は楽しげな軽い足取りで美術室に向かう。

美術室の扉の前で一瞬、鍵かかっているかもしれないという不安が頭を横切ったけれど、幸いなことに鍵をかけ忘れたらしく扉はいつものようにがらっと低い音を立てながら開いた。

いつもと同じように、窓のそばにキャンバスを置くと急いで画材を出す。

描き終わるまでは見つかるわけにはいかない。

急ぎつつも音を立てないように丁寧に静かに準備をしていく。

使う色はクリーム色や、水色などのパステルカラーと暗い紺色。

初雪の嬉しさと、大雪に対する恐怖の色。

いつもはもっと激しくて暗い絵ばかりだから、正直こんなにほんわかとした絵を描けるのか少し不安になってしまふ。

けれどもよくよとしている暇なんてないので、急いで下書きを描いていく。

描き始めていくと、描くまでの不安が嘘のように消えて、薄桃色・クリーム色・紺色と可愛らしくカラフルになっていく。

あれだけ不安だったほんわかした絵はどんどん完成に近づいていくけれど、全く満足出来なかった。

大雪に対する恐怖、上手く表現出来ない。

何色にしよう？

見つからないうちに描き上げなければいけないと焦るばかりで、何もいい色が思いつかない。

ゆっくり深呼吸して、落ち着いてから考えなおす。

私の手は10分以上も絵の具のケースの上をさまよっているが、いい色はどうしても見つからない。

まだ未練は残っていたけれど、このまま悩んでも描ける気はしなかったから、片づけのためゆっくりとキャンバスに手をかけた瞬間

間、急に後ろから声が聞こえた。
少し慌て気味に後ろを振り向くと、そこに居たのは栗色のふわっとした髪の小柄な少女。

「灰色、とかどうですか…？」

聞き取るのが大変なほどとても小さい声だったけれど、少女の透き通った綺麗な声のおかげできちんと聞き取れた。

一瞬天使様じゃないかなと勘違いしてしまうほど、可愛らしくて綺麗な声。

「あ、あの…。」

「えっと…。」

話し始めようとすると、タイミング悪く相手の声と重なってしまう。

「あつ、あの。先に、どうぞ。」

『お先にどうぞ。』と言おうとしたが、お言葉に甘えてここは先に話し出すことにする。

先にどうぞ、なんて話しはじめる順番を押し付けあっている時間も無駄だし。

「ありがとう。いきなりだけど…名前聞いてもいいかな？」

まあ一番の理由は相手名前を知らないと話しどころじゃない、そう思ったから。

彼女ははっとした顔をしていきなり慌てて話し出した。

はっとして顔を上げた時にちらりと見えた少女の顔は多少幼く見え

るものの可愛らしく、まさに天使だった。

「1年E組、天原桃花です。」

言い終わると照れたように頬を桃色に染めながら微笑みかけてくる。
うわ、可愛い。

目の前で微笑んでいる彼女は、女の私でも思わずじっと見つめてしまふほど可愛らしくて魅力的だった。

「先輩は2年の蒼原青華先輩ですよね？」

「え…？…ああ、そうだけど…。」

あれ、天原さんとは今日で初対面はずなのに、なんで私の名前なんか知ってるんだろう。

きょんとしている私を見て、天原さんはくすりと笑って答えを教えてくれた。

「実は私、ここですって蒼原先輩のこと見てたんですよ。えーって確か秋からです。」

ずっとここから見てたって…要は…。

「天原さんは…ストーカー…なの？」

いきなりこの質問をするのはちょっと失礼だったかな、なんて思いつつも遠慮なしに聞いてみる。

天原さんは一瞬さっきの私みたいにきょんとした顔をしてから、両手を振りながらを慌てて答え始めた。

「えっ？ スツ、ストーカーではないと……あ、いやストーカー……です。」

ストーカーであることを自ら認めてしょぼんと肩を落とす天原さん。なんか、天原さんって面白い。

ストーカーされるのは普通は嫌なはずなのに、目の前でしょぼんと肩を落としている天原さんへの嫌悪感はなくなくて、むしろ可愛らしくて面白い魅力的で素敵な子だとすら思ってしまう。

「先輩。続き描かないんですか？」

つぶらな瞳をきらきらと美しく輝かせながら聞いてくる。

可愛い瞳に小柄な体躯にふわふわとした髪……彼女は小学校の頃に飼っていた人懐っこいうさぎにそっくりだった

天原さんのことは心の中ではうさぎちゃんと呼ぼうかな。

「先輩の絵の続き、見たいです。」

うさぎちゃんと飼っていたうさぎのことを考えてぼーっとしている私の顔を覗き込んでそう言った。

はっ、いけないいけない。

昔からマイペースでのんびりと考え事ばかりしてしまう悪い癖はまだ直っていないようだった。

「……ああ、折角教えて貰ったし描こうかな。」

灰色の絵の具をパレットに出し、濃さを調節していく。

濃いめの灰色から薄め灰色まで僅かな違いをつけたものをいくつか作ると、筆に絵の具をつけてキャンパスに向かう。

さっきまで描けないと諦めていたのが嘘のようで、筆はキャンパス

の上を駆け回っていく。

「わぁ!」とか「素敵……。」とかうさぎちゃんが呟く声が何故か嬉しくて、筆がキャンパスを走っていくスピードはいつもより各段に速い。

「これで完成……、かな。」

出来上がった絵を見ると今まで賞を取ったどんな絵とも比べ物にならないほど上手に描けていて、思わず胸の前でガッツポーズをしまった。

天原さんも私の自信作を気に入ってくれたようで、目を大きく見開いて「すごい……。」と一言言った後、にこにこ可愛らしく微笑みながらずっと拍手をしてくれていた。

今季の中——いや、今までで一番の傑作だろう。

これならコンクールに出したら金賞でも狙えるだろう。

だけど、私はその絵をうさぎちゃんに差し出した。

幸いキャンパスは部屋に飾ることができるくらいのサイズ。

断られたらどうしようと不安が頭をかすめたが、彼女はいいんですか?!と言うと、私の手からキャンパスを受け取り、嬉しそうに笑ってくれた。

暖房もつけていない美術室は寒いはずなのに、不思議と寒さは感じず、とても暖かく感じた。

雪（後書き）

12／29～1／4は帰省のため更新できないと思います。

初めてのお絵かき（前書き）

あまりキャラは出ないけれど、キャラ紹介を入れるか悩んでいます
……。

新キャラ出たら入れようかなあ……。

初めてのお絵かき

「こんにちは。」

大雪の日以降、うさぎちゃんは毎日美術室に来て、私が絵を描いている様子をずっと楽しそうに眺めている。

時には私に描いて欲しい絵のリクエストをしたり、様々な色が並べられている絵の具ケースを目を輝かせながら見ていたりしていた。今日も美術室にやって来て、私の座っている横に椅子を置く。

「今日はなんの絵を描くんですか？」

いつもと違って絵を描く準備をしない私に、うさぎちゃんは首を傾げながら不思議そうな顔でたずねてきた。

「今日は絵は描かないよ。」

当たり前のように言った私に、うさぎちゃんは少し驚いたような悲しそうな顔した。

うさぎちゃんが毎日美術室に来てくれる理由は私の絵を見るためだから、悲しそうな顔をするのは当然なのかもしれない。

だけど今日は――

「今日、私の誕生日なんだ。」

12月19日、その日は私が産まれてきた日――つまり私の誕生日。ちなみに青華という名前はクリスマスに歌う聖歌という名前が語源だったりする。

クリスマスには少し遠いけど。

誕生日であることを告げるとうさぎちゃんは少し申し訳なさそうな顔をして

「私、青華先輩の誕生日知らなくて…えっと…プレゼント、用意してないんです。」

と謝ってきた。

うさぎちゃんが私の誕生日を知らないのは、私が教えてないから当然のことだ。

むしろ知っていたらうさぎちゃんのストーカー疑惑が余計に高まるだろう。

「誕生日プレゼントとして、うさぎちゃんに絵を描いて欲しいんだ。」

私は毎日ここで絵を描いて、うさぎちゃんは毎日その姿を見ている。けれど私は、うさぎちゃんが絵を描いているところも、うさぎちゃんが描いた絵もまだ見たことがなかった。

まあそれが見たかったからわざとうさぎちゃんに誕生日を教えなかったわけなんだけど。

うさぎちゃんはしばらく悩んでいたけれど、私が折れないことが分かったのか、じっと真顔で見つめられるのが怖かったのか、観念して分かりました…と小さな声でぼそつと呟いてくれた。

少し拗ねたような声も顔もなんだか可愛く思えてくすりと笑うと、うさぎちゃん是不機嫌そうに、うう…と小さな声で嘆いていた。

うさぎは嫌そうな顔をしたり、わざと私に聞こえるくらいの声でやだなあなんて呟いていても、絵を描く準備をしている手は決して止めない。

そんなうさぎちゃんは最近流行っているツンデレというやつなんだろうか。

「あ、青華先輩。絵って何を？」

ツンデレについてぼーっと考えている間に絵を描く準備は終わったようで、うさぎちゃんは左手にパレットを持ちながら聞いてきた。お題を指定してあげた方がうさぎちゃんにとっては描きやすくなつて嬉しいだろう。だけど、私は無題の時うさぎちゃんがどんな絵を描くのか知りたかった。

うさぎちゃんに意地悪はしたくないという気持ちは大きいけれど、その気持ちは好奇心には勝てない。

「桃花の描きたいもの、それを描いてほしいかな。」

ストレートに言わなかっただけで、これも無題みたいなもの。

無題だと気付いていないのか、私の描きたいものかあなんて桃花は呟いていた。

桃花は決まらないから具体的な希望を言って欲しいのか、時々私の顔をちらちら見ながらずっと考えていた。

桃花が描くものが決まらないままかれこれ20分が過ぎた。

なかなか描き始めないうさぎちゃんに催促しようとする、うさぎちゃんはいきなり決めたっ！なんて叫んで様々な色をパレットにぶちまけていく。

入れていく、じゃなくてぶちまけていく。

見た目に合わず大ざっぱなところもあるんだなと思つて思わず苦笑してしまう。

「あ、青華先輩は完成するまで後ろ向いてて下さいね。」

描くことに夢中になっていたうさぎちゃんがいきなり私の方を振り返り、それだけ告げると再びキャンバスに向かって絵の続きを描き始めた。

本当は絵を描いているうさぎちゃんの姿も見なかったけれど、仕方ないので諦めることにした。

これ以上うさぎちゃんにわがままを言うのも可哀想だし、何より機嫌を悪くさせちゃったら後が大変そうだし。

待っている間、今朝誕生日プレゼントに貰った有名な画家の画集を眺めていると、桃花が声をかけてきた。

まだそんなに時間は経っていないと思ったのに、うさぎちゃんが描き始めてからもう2時間も経っていた。

夢中になってると時間が過ぎるのは驚くほど早い。

「先輩？」

なかなか降り向かない私に、桃花は心配そうにもう一度声をかけてきてくれる。

またぼーっと考え事をするとところだった、危ない危ない。

急いで振り向くと、キャンバスに描かれていたのは――

「私の、絵？」

キャンバスには、窓から雪がちらほらと見える美術室と、キャンバスに向かって真剣な顔をして絵を描いている私の絵が描かれていた。きつと、いや確実にうさぎちゃんと会った日の絵だろう。

うさぎちゃんのパステルカラーを基調とした可愛らしい絵は、特徴を良く掴んで描いてあって、色のセンスも私と違って凄く素敵だった。

今までうさぎちゃんに絵を描かせなかったのが惜しいと思う位、とても上手い。

「え、と…どうですか？」

何も言わず黙って絵を見ている私に、心配そうに聞いてきた。
上手すぎて思わず言葉に詰まっていただけなんだけれど、うさぎちゃんからしたら心配にもなるだろう。

「とっても可愛くて、上手で……ありがとう、嬉しい。」

お礼を言うのはなんとなく恥ずかしくて、顔がほんのり赤らんでしまっていることは容易に想像出来た。

最後の方は少し早口になってしまったけれど、まあお礼は言い切れたからいいでしょう。

桃花も私の言葉を聞いて安心したのか、よかったあと言いながら少し笑っていた。

「先輩顔真っ赤ですよ。」

桃花に比べて表情の乏しい私の、顔を赤らめている珍しい表情を見れたのが嬉しいのか、桃花はからかうような楽しそうな口調で言った。

からかわれたことが恥ずかしくて、私の顔はさらに赤くなっていく。

「こっ、これは夕日が当たっているのと、後ちよつと寒いからであって、別に私が赤くなってるわけじゃないからね！」

慌てて言い訳すると、桃花は納得したように手をぼんと叩いてから、少しつまらなそうにそうですかとだけつぶやいた。

そんな言い訳でだまされるのはきつと桃花くらいだろう。

会話が途切れて、少しの沈黙が出来てしまった。

突然沈黙を破るように桃花は

「青華先輩。」

と真面目な顔をして私の名前を呼んだ。

桃花の真面目な顔を見るのは初めてだったから、緊張してしまっ

「なに？」

と返すだけでもう精一杯だった。

たった一言を言うだけだったのに、声が少しうわずってしまっている。

桃花は私が緊張していると察したのか、顔を綻ばせた。

「先輩、誕生日おめでとうございます。」

たった20文字の短いお祝いの言葉。

それも定型文の丸写しのような、ありきたりな言葉。

だけどそのありきたりな20文字の短い言葉は、とても私を幸せな気持ちにしてくれて、私を笑顔にしてくれた。

うさぎちゃんの言葉とキャンパスは最高の贈り物。

——まあ、よく見ると髪分け目が逆だったけれど。

二人きりのクリスマス（前書き）

ブログ投稿が遅くなったため、今ごろクリスマス回という……すみません。

二人きりのクリスマス

12月25日、キリストの降誕祭。

私は別にキシタンというわけじゃないし、これといった予定もないから普段の1日と何も変わりはしないんだけど。

街は私の冷めた態度とは違って、まだ点灯していないけれど夕方頃には綺麗に輝くであろうイルミネーションや、サンタの格好をした可愛らしい店員さんなどクリスマスムード一色だった。

私は今日も美術室に行こうと学校に向かったけれど、もう冬休みに入ってしまったためか、クリスマスは先生達も仕事はせずプライベートな時間を楽しみたいのか、学校の門は開いていなかった。美術室に行ったらうさぎちゃんに会えるかもしれないという私の淡い期待は、固く閉ざされた鉄の門に裏切られてしまった。

まあクリスマスだし、うさぎちゃんも友達や家族、居るかは分からないけれど彼氏と楽しく過ごしているだろう。

仕方なく来た道を引き返して、バス停に向かうことにしよう。このまま家まで帰るのは少し腹ただし、隣の美術館にでも向かうかな。

きつとクリスマスのおかげでいつもと違う絵を展示しているだろうし、確か冬のコンクールの受賞作品の展示会もやっていたはずだ。コンクールでは最優秀は他の人が受賞してしまったけれど、優秀賞を受賞することができた。

美術館はここからなら交通の便もよく、バスですぐに行くことができる。

今日がクリスマスであることに少し感謝しながらバス停に向かっていると

「うさ：じゃなかった、桃花ちゃん？」

目の前にはコートにマフラーや手袋、耳当てなどでしっかり防寒対策をしている桃花が居た。

あんなに防寒対策をしてもまだ寒いのか、うさぎちゃんは両手で体を抱きしめながら歩いている。

うさぎちゃんはようやく私に気付いたみたいで、体を抱きしめていた手を離し、大きく手を振って走って来てくれた。

「青華先輩おはようございます。」

私の前までくると、にっこりと笑いかけて挨拶をした。

うさぎちゃんも私と同じ、休みである今日にわざわざ制服で来ている。

ということとは――

うさぎちゃんはクリスマスなのにわざわざ美術室に来た、ということだろう。

嬉しい気持ち反面、少し申し訳ない。

「おはよ。」

「学校、開いてないんですか？」

「……うん。」

しばしの沈黙。

うさぎちゃんの行き先も（多分）美術室だったから、お互いどうすればいいのか分からなくて黙っているだけなんだろうけれど、この沈黙は結構気まずい。

あまりの気まずさに、話しかけようとする

「せ、先輩は今からどこ行くんですか？」

と、うさぎちゃんが慌てたように話しかけてきた。

うさぎちゃんも私と同じで、この沈黙に耐えられなかったんだろう。

「美術館…、だけど。よかったら…」

「あ、私も行きたいですっ！」

にこにこしながら右手をあげて言ってくるうさぎちゃん。

うさぎちゃんは従順で、人なつっこくて、犬にも似ているかもしれない。

まあ、うさぎちゃんというあだ名が気に入ってるから、あだ名はうさぎちゃんのままだけれど。

「じゃあ、行きましようか。」

そう言ってぎゅっと手を握りしめてきた。

二枚の手袋の布越しでは体温は伝わらない。

だから消して体温なんて感じないはずなのに、うさぎちゃんに握りしめられた左手は、うさぎちゃんの体温を感じたように暖かった。うさぎちゃんと手を繋ぐことに気を取られていると、うさぎちゃんの足がおかしな

「ねえ、うさぎちゃん。」

「はい、なんでしょう？」

「そっちのバス停じゃ逆方向だよ。」

天然は怖い。

危うくバスを間違えるところだった。

気を取り直し、逆方向に向かう。

クリスマスにこんな楽しい気分になったのは何年ぶりだろう。

ぎゅっと繋がれた手を見るとなんだか嬉しくなって来てしまう。

ぎゅっと少し力をこめて握ると、うさぎちゃんもぎゅっと力を込めて握り返してくれた。

今日はきつといい日になる気がする。

二人きりのクリスマス（後書き）

最後の文がフラグに見えるのは私だけじゃない……はず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019z/>

絵描き少女と夕暮れうさぎ。

2012年1月9日20時12分発行